

教育—その光と影

初冬。ある中学のある教室。にぎやかな器楽合奏が始まろうとするとき、突然女先生は形相を変えて、つかつかA君に近づき、横顔をぴしりつ。あまりのことにA君もクラス全員ただぼう然となる。しかし、事態はすぐ分かった。A君は右手が不自由、音楽は縦笛の時間、左手で支えても右手で笛穴が押さえられない。それを不まじめと、ふなれな若い教師は怒ったのである。子供たちは弁解してあげなかった。人気のない先生には黙っているのが得策だからである。

あまりの落ちこみに、子を問いつめて事情を知った母はがく然となる。これまでその障がい^がの故でめげたことは一度もなかったからである。「こらえようね。三月卒業するまでね」。涙する母子家庭。教師の権威に頭を下げていのではない、内申書の権力にガマンしているのだ。

ついに、その女教員からのわびも、どの教師からの励ましも、その子にはなされなかった。荒廃した教育現場というよりほかに、私は言葉をしらない。

いま私は連想する。二十年前刑死した獄囚歌人島秋人を。彼の中学時代は教師にも恵まれなかった。荒むまま社会へ出、盗みに入り騒がれて殺人、死刑。最悪の人生行路である。獄中、一人だけ心に残る先生を思い出し、やがてその先生夫妻の励ましを得て、悔いとごんげの精神は深化し、歌に表現しつつ死につく。

「ほめられし一つのこのうれしかりいのち愛しむ夜のおもいに」。生涯に一度だけほめられたことがあったなあ、あの先生に。彼にとつての唯一の微かな光。それが彼を神の座近くへ歩ますのである。酷薄だった先生たち。「鉄鋌の多き靴にてけられたる憶いが愛しあまりに遠く」。ここではうらみつらみは消え、赦しだけが伝わってくる。

ひとりだけでよい。信じてくれる者が居さえすれば。A君よ、君には君のために祈る母がいる。

(一九八六年十二月二十七日)